

21 宋板傷寒論不可篇の成立について

牧角和宏

〔はじめに〕 宋板傷寒論（明趙開美本）は序文、弁脈法、平脈法、傷寒例、瘧濕暍、三陰三陽篇（いわゆる六経病篇）三九八条文および不可篇二八七条文（不可發汗・可發汗・發汗後・不可吐・可吐・不可下・可下・發汗吐下後）より構成される医学書である。

不可篇は三陰三陽篇の「重集（再編集）」である、と不可篇の冒頭に記されていること、注解傷寒論において不可篇が大部分削除されていることなどから、三陰三陽篇に比較して従来さほど検討がなされていない。今回不可篇について検討したので報告する。

〔目的〕 傷寒論不可篇の由来を検討する。

〔方法〕 脈経卷七、千金翼方卷九・十、外臺秘要、太平聖惠方卷八等の仲景書（傷寒論・金匱要略・金匱玉函経 関

連条文をそれぞれ宋板傷寒論と比較検討した。テキストは影宋版脈経・元大徳版千金翼方・南宋本太平聖惠方・宋板外臺秘要（以上オリエント）・清陳世傑本金匱玉函経・明趙開美本傷寒論・元鄧珍本金匱要略（以上燎原）を用いた。

〔結果〕 宋板傷寒論不可篇二八七条文の対応条文は宋板三陰三陽篇二一七条文、千金翼方二四五条文、脈経二七五条文、太平聖惠方一四一条文、外臺秘要九五条文、金匱玉函経二六八条文であった。条文数は脈経が最多で、各篇の構成も脈経に最も近似していた。また、不可篇の処方指示一五〇条文中一四四条文において文末の属・与・宜が脈経と一致していた。同様の検討を三陰三陽篇で行うと、千金翼方が条文数、構成、文末表現において最も近似していた。

〔考察〕 成無己の注解傷寒論は宋板傷寒論に基づいてはいるが宋板そのものではない。注解傷寒論と宋板傷寒論との相違は不可篇において顕著である。注解傷寒論の不可篇はわずか六十条文である。注解傷寒論では、三陰三陽篇と同じ条文は原則として不可篇からは削除

され、さらに、宋板で不可篇にしか存在していない十条文をも削除しているのである。注解傷寒論から宋板不可篇の旧態をうかがい知ることは困難である。注解傷寒論の研究者達はそもそも不可篇を認知すらしていないことであろう。

さて、不可篇は、必ずしも三陰三陽篇と同一ではなかった。むしろ条文数、構成、表現において脈経と近似していた。脈経は三世紀頃に成立したとされる医学全書であり、千金翼方（七世紀）や外臺秘要（八世紀）よりもはるかに古いものである。脈経巻七には不可形式の傷寒論が引用され、脈経巻八には現伝金匱要略にほぼ等しい条文群が存在している。すでに小曾戸・真柳らが指摘していることであるが、傷寒論の旧態が不可形式によるものであったことを暗示しているようである。一方で、三陰三陽篇は不可篇よりも千金翼方に類似していた。これらの事実より、宋以前の傷寒論には三陰三陽形式と不可形式の異なる伝本系統が存在していたことが想定されよう。

次に、不可篇が三陰三陽篇の重集であるならば、そ

の成立は三陰三陽篇成立の後ということになる。しかし、千金翼方や外臺秘要よりもはるかに成立年代の早い脈経に、不可形式の傷寒論のみが引用されているのである。三陰三陽形式の傷寒論の引用は脈経よりも時代的に遅れた書物に始めて出現しているのである。引用文献の成立年代から考察すると、そもそも傷寒論は不可の形式で伝えられていたものが、後に三陰三陽の形式に整備されたものである可能性が示唆されるのではなからうか。

「結語」 宋板傷寒論不可篇は三陰三陽篇の単なる重集ではなく、別系統の伝本であり、その成立は三陰三陽篇よりも古い可能性が示唆された。傷寒論は三陰三陽篇のみでなく、不可篇その他の諸篇をも検討する必要があると考えられた。また、注解傷寒論のみの研究は十分であることを指摘したい。

（北陸大学薬学部東洋医薬学教室）